

# An examination of the reception of Liaozihi Zhiyi 喬志異 (Strange Tales from a Chinese Studio) in the Qing dynasty, based on folk riddles

FAN Keren

Keywords: Strange Tales from a Chinese Studio, folk riddles, reception

## Abstract

This study is based on the riddles in Zhonghua Mishu Jicheng 中華謎書集成 (The collection of Chinese riddles), with regards to the book Liaozihi Zhiyi (Strange Tales from a Chinese Studio). The study, in the meantime, combines the reception of the drinking games and drama, to research and understand how Liaozihi Zhiyi was received during the Qing dynasty.

The stories in Liaozihi Zhiyi can be divided into three main categories: “Extraordinary people and crazy events,” “Advise the good and punish the evil; point out the mistakes of the times as well as social problems, and persuade others to correct them,” and “Pretty women and the good wife.” These three categories were all quoted in the answers to these riddles, and there were no significant differences in the frequency of their occurrence. However, upon further subdividing these main categories, the story of the “Two Beauties” in the category of “Pretty women and the good wife” is generally favored more by the genre of popular literature than by others.

The story of the “Two Beauties” mainly discusses a husband who has many beautiful wives. These stories were widely used in the riddles, drinking games, and dramas, reflecting the male-dominated, social characteristic of the Qing dynasty. Meanwhile, from the genre of popular literature, Liaozihi Zhiyi’s story of the “Two Beauties” should be more popular and familiar to readers than other stories in the same book.



# 謎語から見る『聊齋志異』の受容 —清代を中心に—

樊 可人

キーワード：聊齋志異、謎語、受容

## はじめに

清初の文人蒲松齡（1640～1715）が著した『聊齋志異』は、神鬼や妖怪などに関する不思議な話が文語体で書かれた短編怪異小説集である。同書は、作者の生存中に抄本の形によって愛読者に読み継がれ、乾隆三十一年（1766）に刊本によって、世に流布し始めた。日本には同書の刊本が出た翌々年に舶載された記録が見られ、のちにいくつかの作品に翻案され、明治に入ると、続々と訳された<sup>1)</sup>。

同書の人気ぶりは中国本土における改編作品の多さからも窺える。劇で言えば、乾隆・嘉慶年間（1736～1820）に作られた『鸚鵡媒』『文星榜』『報恩猿』『洞庭縁』『陸判記』『点金丹』はそれぞれ『聊齋志異』の「阿宝」「胭脂」「小翠」「織成」「西湖主」「陸判」「辛十四娘」から取材しており、清末になると、『胭脂鳥』『脊令原』『絳銷記』『如夢縁』『神山引』『胭

---

1) 磯部祐子「江戸時代における『聊齋志異』の受容 —『鷗洲餘珠』を例に—」（『富山大学人文学部紀要』第64号、富山大学人文学部、2016年）、翁蘇倩卿「日本近代文壇に於ける『聊齋志異』の受容と変容」（『国際日本文学研究集会会議録』、国文学研究資料館、1983年）などに詳しい。

脂獄』なども『聊齋志異』の話に基づいて作られた<sup>2)</sup>。これ以外にも、『聊齋志異』が世に現れることによって、さらに多くの作品が生み出された。例えば『聊齋続編』『後聊齋志異』『女聊齋』などの「聊齋」という名を借りて書かれた作品もあれば、『諧鐸』『夜談隨録』など『聊齋志異』を意識的に真似て作られた作品もある<sup>3)</sup>。

悔堂老人が乾隆五十七年（1792）六月に書いた「『聴雨軒筆記』跋」には「康熙間、商丘宋公漫堂、新城王公阮亭皆喜説部、於是海内名士、人各著書。…然書可等身、值昂而難以卒購。未若單詞片帙之易於訪求也。故蒲柳泉『聊齋志異』一出、即名噪東南、紙為之而貴。」（康熙の間、商丘の宋公漫堂、新城の王公阮亭 皆 説部を喜び、是に於いて海内の名士、人 各書を著す。…然れども書 身に等しくなるべく、値 昂くして以て早く購ふこと難し。未だ単詞片帙の訪求より易きに若かざるなり。故に蒲柳泉の『聊齋志異』一たび出づれば、即ち名 東南を噪がし、紙 之が為にして貴し。）とあることから<sup>4)</sup>、『聊齋志異』は刊行されてから、間もなく人気を博したことが分かる。また、民国八年（1919）刊行の『古今小說評林』に「『聊齋志異』一書、幾於家家有之、人人閱之。多有崇拜其筆墨之佳者、甚且欲學之以為作文紀事之法。」（『聊齋志異』一書、家家 之を有し、人人 之を閱るに幾し。多く其の筆墨の佳きを崇拜する者有りて、甚だしくは且つ之を学びて以て作文紀事の法と為さんと欲す。）とあり<sup>5)</sup>、民国の頃になるとどの家も持っているほど、『聊齋志異』は広く普及していることが分かる。

2) 閔德棟・車錫倫編『聊齋志異戲曲集』（上海古籍出版社、1983年）、鄭秀琴「清代『聊齋志異』戲曲改編及其研究綜述」（『蒲松齡研究』2006年第4期、蒲松齡紀念館）などに詳しい。

3) 朱一玄『聊齋志異資料匯編』（南開大学出版社、2002年）「五、影響編」、陳炳熙「論『聊齋志異』對清代文言小說的影響」（『蒲松齡研究』1998年04期、蒲松齡紀念館）、崔美榮・胡利民「『聊齋志異』偽書發展流變」（同2007年01期）などに詳しい。

4) 『聴雨軒筆記』（上海進歩書局、刊行年不明）。

5) 寅飛等『古今小說評林』（上海民權出版部、1919年）。

上に紹介した戯曲や続編などのほかに、人々の生活にも『聊齋志異』は溶け込んでいた。元宵節や普段の酒席で遊興に供される謎語（謎掛け）には、同書に関するものが少なからず残されている。従来の研究では、『聊齋志異』の版本考、本事考、人物形象研究は盛んに行われてきたものの、五百話近く収められている『聊齋志異』の、清代における受容状況については、なお考察する余地がある。そのため本稿では、同時代に作られた謎語作品集所収の『聊齋志異』に関する謎語に考察を加え、清代では、『聊齋志異』をはじめとする志怪小説のうち、どのような作品がよく知られていたかについて論じる。

## —

本稿では古今の謎語作品集を広く集める『中華謎書集成』を用いて、清代に作られた『聊齋志異』に関する謎語を集計した。その結果、『聊齋志異』の篇名を当てさせる謎語が四百七十二条見られた<sup>6)</sup>。これに対して、同じく志怪類作品が収録されている沈起鳳（1741～1802）の『諧鐸』、沈氏と同じ頃に活躍していた和邦額（生卒年不詳）の『夜譚隨録』の篇名を当てさせる謎語はそれぞれ九条と三条しかなく、『聊齋志異』に比べると非常に少なかった。『聊齋志異』の人気の高さは謎語の数からも、はっきり窺える。

6) ここでは、『中華謎書集成』第一冊（人民日报出版社、1992年）、同第二冊（人民日报出版社、1993年）を使用した。主に民国年間の謎語作品集を収録する同第三冊（人民日报出版社、1994年）には徐兆瑋編の『文虎瑣談』『文虎匯編』、袁薇生の『鉤月瘦詞』という三種の清末民初の謎語作品集がある。一部清代に作られた謎語が収録されているが、三書の成立時期が民国年間になる可能性があるため、これらの本に収録されている『聊齋志異』の篇名を当てさせる謎語はこの数字には含んでいない。なお、筆者は三書の『聊齋志異』の篇名を当てさせる謎語を集計し、「又」を含めて百十八の篇名が謎底とされていることを確認した。このうち、約四分の三の篇名は本節の表に挙げる篇名と重複していない。重複している篇名を謎底にされた回数に加えたとしても、本論の分析、結論は変わらないことを先に断っておく。

これらの謎語の中でもっとも早く作られたのは、佚名ではあるが咸豊年間に編纂されたと思われる『映雪山房謎語』所収の十六条の作品である<sup>7)</sup>。

娶於涂山	狐嫁女
老蚌生珠	韋公子
鳳姐	巧娘
坑儒	泥書生
吾生在未戌之間	義犬
彑丙	丁前溪
百井之半	五通
身美而頭不美	王大
如在其左右【卷帘格】	小二
死則同穴	土偶
超升仙界	跳神
蠭	美人首
畎	野狗
螬	李生
會試出榜	張貢士
桃李相投	果報

上に挙げたように、「坑儒（儒者を埋める）」を謎の問題（以下「謎面」）とし、『聊齋志異』の篇名「泥書生（読書人を泥で埋める）」を当てさせたり、「桃李相投（桃や李を送る）」を謎面とし、『聊齋志異』の篇名「果報（果物で報いる）」を当てさせたりしている。これに対し原作では、「泥書

---

7) 『中華謎書集成』に使用された本書は抄本であるが、最初のページに「壬子年起、已掲」という一文がある。解説によると、内容などから「壬子」は咸豊二年（1852）を指していると推測される。

生」は泥が化けた書生が陳氏の可愛らしい妻を無理やり同衾させるという不思議な話であり、「果報」は盜人や他人の財産を横領した人が罰を受けたという因果応報に関する話であるため、謎語におけるこれらの篇名を持つ意味は原作と大きく掛け離れている。また、「坑儒」を謎面とし、『第六才子書』にある曲文「悶煞讀書客（讀書人を死に至るほど悶え苦しませる）」を当てさせる謎語もあることから<sup>8)</sup>、『聊齋志異』の篇名や『第六才子書』の曲文をが謎語の答え（以下「謎底」）になる場合には、答える側は当然ながら同書の篇名や曲文を熟知しておく必要があつただろう。

四百七十二の謎語のうち、もっとも多く取り込まれたのは「果報」と「陸判」である。清末の張玉森（生没年不詳）により清代の謎語作品集を広く集めた作品集、『百二十家謎語』（光緒三十二年〔1906〕序付き）が現れるまでの約五十年の間に、「果報」は十一回、『聊齋志異』の篇名を当てさせる謎語の謎底とされている<sup>9)</sup>。一方、「陸判」は光緒二年（1874）に刊行された『十五家妙契同岑集謎選』滌性山房謎稿に篇名を当てさせる謎語が収録されてから多羅山樵編纂の『瘦辭匯』が光緒二十六年（1900）に刊行されるまでの間に、それぞれ異なる謎語の謎底として十一種の謎語作品集に使われていた。

「果報」「陸判」をはじめ、合計二百六十二篇の『聊齋志異』の話が、四百七十二条の謎語の謎底にされている（このうち複数の篇名を当てさせる謎語もある）。表にしてまとめると、以下のようになる。

謎底にされた回数	篇名
11	果報、陸判

8) 『中華謎書集成』第二冊（注6書）所収『百二十家謎語』慕真山人謎剝。

9) 『聊齋志異』の篇名を当てさせる謎語のはんどんに「聊目」「聊齋目」「志目」といった指示が付されている。「果報」のような篇名は謎語によって『聊齋志異』の篇名を当てさせるか否かははっきりと判断できない場合がある（例えば「投我以木桃 果報」のように、謎面と謎底しか書かれていない謎語がある）。このような明確に判断できないものは集計に含んでいない。

9	美人首、織成
8	河間生
7	夜明、保住
6	竹青、象、快刀
5	巧娘、 <u>五通</u> 、 <u>小二</u> 、耳中人、局詐、牛成章、画馬、珠兒、 <u>封三娘</u> 、酒友、二班、金生色、偷桃、 <u>連城</u> 、周三、 <u>天宮</u> 、 <u>嘉平公子</u>
4	靈官、堪輿、造畜、男妾、 <u>梅女</u> 、石清虛、 <u>呂無病</u> 、小人、仇大娘、頭滾、鬼作筵、 <u>小謝</u>
3	丁前溪、張貢士、姬生、 <u>西湖主</u> 、 <u>鐘生</u> 、 <u>連瑣</u> 、 <u>賈奉雉</u> 、鼠戲、 <u>神女</u> 、秦檜、 <u>仙人島</u> 、鳥語、单父宰、 <u>白于玉</u> 、 <u>樂仲</u> 、 <u>翩翩</u> 、 <u>細柳</u> 、顛道人、双灯、 <u>蓮香</u> 、狐懲淫、 <u>素秋</u> 、二商、負尸、于江、車夫、孝子、 <u>喬女</u> 、閻羅薨
2	韋公子、義犬、跳神、李生、 <u>魯公女</u> 、長治女子、鬼令、拆樓人、賈兒、苗生、 <u>宦娘</u> 、蟄竈、促織、 <u>菱角</u> 、三仙、 <u>鞏仙</u> 、李伯言、戲術、祝翁、岳神、向杲、噴水、繞黃梁、蛙曲、 <u>葛巾</u> 、羅祖、 <u>劉夫人</u> 、田子成、 <u>辛十四娘</u> 、酒狂、 <u>画皮</u> 、大人、人妖、泥鬼、元少先生、劉亮采、崔猛、紫花和尚、任秀、毛大福、鏡聰、 <u>伍秋月</u> 、鴻、新郎、 <u>青梅</u> 、 <u>金陵女子</u> 、胡大姑、竈飛相公、成仙、 <u>霍女</u> 、某乙、金和尚、三生、水災、江中、農人、 <u>念秧</u> 、 <u>小翠</u> 、鵠異、 <u>武孝廉</u> 、真生、王十、狐譖、 <u>董生</u> 、 <u>鬼妻</u> 、花神、葉生、金陵乙、地震、竈折獄、木雕美人、珊瑚、口技、采薇翁、 <u>俠女</u>

1	狐嫁女、泥書生、王大、土偶、野狗、瞳人語、孫必振、李司鑒、郭生、愛奴、金永年、綠衣女、王蘭、夢別、竇氏、細侯、邑人、庫官、張誠、妾擊賊、鴉頭、蕭七、犬灯、种梨、周克昌、古瓶、汪士秀、侯靜山、雲翠仙、狐聯、王貨郎、三朝元老、錢流、何仙、潞令、罵鴨、陝右某公、王子安、香玉、馮木匠、嬌娜、真定女、鳳仙、陽武侯、錢卜巫、狐入瓶、咬鬼、房文淑、勞山道士、湘裙、白秋練、薛慰娘、蹇償債、寄生、齊天大聖、武技、聶小倩、小官人、蓮花公主、杜翁、農婦、柳氏子、某甲、張不量、王六郎、棋鬼、役鬼、驅怪、王成、丐仙、考城隍、賭符、伏狐、林氏、于去惡、僧術、花姑子、顧生、豢蛇、布商、阿宝、胭脂、九山王、宮夢弼、牛飛、雷曹、死僧、尸变、庚娘、八大王、金姑夫、績女、祿數、柳生、夏雪、冷生、晝痴、粉蝶、蘇仙、橘樹、江城、獅子、嬰寧、桓侯、荷花三娘子、曹操冢、席方平、单道士、佟客、閻羅宴、一員官、青蛙神、竇肉、郭安、張老相公、閻羅、王者、画壁
---	---

上の表には、合計二百六十二の篇名がある（下線部については、後述する）。それぞれの項目に挙げた篇名は、謎底にされた順に並べている。「花神」という篇名は、青柯亭本系統以外では「絳妃」となっていることから<sup>10)</sup>、従来の研究が指摘してきたように、清代にもっとも流通している

10) ここでは、青柯亭本『聊齋志異』（芸文印書館影印、2006年）を使用した。また、張友鶴輯校『聊齋志異会校会注会評本』（上海古籍出版社、1978年初版、2019年第3版）、任篤行輯校『全校会注集評聊齋志異（修訂本）』（人民文学出版社、2016年）を参考にした。なお、表に挙げた篇名は謎底にされた篇名をそのまま写したものである。

のは、青柯亭本系統の『聊齋志異』であることが窺える。

上に挙げた篇名以外に、「大富貴亦寿考」を謎面とし、「四子書」にある人名、地名である「告子」「儀」と、『聊齋志異』の篇名「織女」を当てさせたり（光緒二年〔1876〕刊『十五家妙契同岑集謎選』山椿吟館謎稿）、「米」を謎面とし、「四子書」にある「其人亡」という一句と、『聊齋志異』の篇名「小一<sup>マツ</sup>」を当てさせたりする（光緒十九年〔1893〕刊『囲炉新話』所収「聴雪書屋廬詞」）謎語がある。また、「風定花猶落」を謎面とし、「小紅」「謝自然」という『聊齋志異』の篇名を当てさせたり（『百二十家謎語』〔光緒三十二年〈1906〉序〕「文社日報謎鈔」）、「陶淵明漉酒、劉器之參禪」を謎面とし、「葛巾、玉版」という『聊齋志異』の篇名を当てさせたりする（『百二十家謎語』灯謎集腋「涂説」）謎語もある。

このうち、「織女」は、「書痴」「鞏仙」「蕙芳」に言及されるが、具体的にどの篇名を指しているかはっきりしない。同じくはっきりしないのは「謝自然」である。また、「小紅」は「小梅」に、「玉版」は「葛巾」に登場する人物であり、「小一」は「小人」の誤りだと考えられるが、このようなものは上の表に入れることにした。

なお、「義犬」「三生」「竜」「閻羅」は、同名のものが二篇ある<sup>11)</sup>。一部の作品は果たして蒲松齡の作なのかという問題もあるが、これらは集計時に一回だけ数えることにした。

上の表に挙げた二百六十二の篇名という数は、四百篇を超える話を収める『聊齋志異』全体の半数以上にもなる。そこで、これらの篇名からどのようなことが窺えるかを考察する前に、まずは『聊齋志異』にどのような類いの話が収録されているのかを見ていきたい。

---

11) なお、「五通」「青蛙神」にも「又」の篇名があり、集計時に一回だけ数えることにした。

## —

『聊齋志異』のはじめに置かれている話は、科挙、神仙、孝道という三つの要素から創り上げた「考城隍」である。同書に批評を付けた清代の何守奇は、『批点聊齋志異』所収の同篇の文末に次のような評語を残した<sup>12)</sup>。

一部書如許、托始於「考城隍」、賞善罰淫之旨見矣。  
 一部の書許くの如く、「考城隍」に托始し、善を賞め淫を罰するの旨  
 見れり。

従来の研究も上の何氏の観点に賛同している。例えば、周先慎は「試解開宗明義的『考城隍』一読『聊齋』札記」で、次のように述べている<sup>13)</sup>。

まず、間違いなく言えるのは、「考城隍」は『聊齋志異』の中で、一番早くできた科挙試験に関する題材の作品であり、作者の科挙試験に対する態度と仕途に対する憧れや情熱を示している。…蒲松齡はこの短編小説集を創作するにあたって、真、善、美を讃え、偽りや醜悪を非難するのが思想面及び芸術面での主な目標だと、『聊齋志異』の全書を読み終えれば分かる。そこで、その第一篇は特に「善」を書いたのである。

12) フランス国立図書館蔵、一経堂蔵版。

13) 『北京大学学報（哲学社会科学版）』第47卷第4期、2010年。原文は次の通りである。首先、可以肯定地說、這是『聊齋志異』中最早的一篇有關科挙考試題材的作品、表現了作者對科挙考試的態度和對仕途的向往與熱情。…讀完『聊齋志異』全書、我們就能体会到、歌頌真、善、美、抨擊假、惡、醜、是蒲松齡創作這部短篇小說集的思想追求和藝術追求、而第一篇就突出地寫到了「善」。

確かに、『聊齋志異』には時弊を揶揄して批判する話や、勸善懲惡に関する話が多く収録されているが、実際にはこのような意図とは関係がない話も少なくなく、神鬼や妖怪ともそこまで関わりがない話も多く存在する。

例えば、上の表にある「保住」を要約すると、明末清初の武将吳三桂（1612～1678）麾下の保住は、身振りが素早く、警備が厳重である妾の住まいから珍奇な琵琶を取り出し、吳三桂のもとに届けたという話である。また「快刀」は濟南章丘のあたりで捕らえられた盜賊の一人が非常に鋭利な刀によって斬首され、頭が落ちた後にその刀の切れ味を称えたという話である。このほか、康熙七年（1668）に発生した郯城大地震の様子を記録した「地震」のような非日常的な自然現象を記録する話もある。これらの話は勸善懲惡や時弊を批判するために書いた作品ではなく、単に「奇人異事」を記録するものである。

これに対し、話の内容からだけでなく、「異史氏」と名乗る蒲松齡が所々に書き残した感想文からも勸善懲惡や時弊を批判する意図がはっきり示される場合がある。上の表で取り上げた「韋公子」や「何仙」がこれに当たる。

前者は、咸陽（現在陝西省咸陽市一帯）出身の韋姓の公子が女色に溺れ、のちに気に入った役者の羅惠卿と、楽妓の沈韋娘と寝所を共にした後、自分の子だと分かり、実家に帰った後、「召使いや妓女を姦淫する者は人間ではない」と悔やみ、暫く経って亡くなったという話である。蒲松齡は文末に、姦淫する者は人間の形をしているが、やることは畜生に等しい、と憤りをぶちまけた感想文を残している。

盜婢私娼、其流弊殆不可問。然以己之骨血、而謂他人父、亦已羞矣。

乃鬼神又侮弄之、誘使自食便液。尚不自剖其心、自斷其首、而徒流汗投鴉、非人頭而畜鳴者耶。

婢を盜み娼を私すること、其の流弊 ほとん 殆ど問うべからず。然して己の骨血を以て、而して他人に父と謂はしめ、亦た已に羞ならんや。乃ち鬼神 又た之を侮弄し、誘ひて自ら便液を食はしむ。尚ほ自ら其の心みづかを割き、自ら其の首を断たず、而して徒ただ汗を流し鳩を投ず、人の頭かうべにして畜 鳴く者に非らざらんや。

また、後者は扶乩という占いに精通する王瑞亭という人が、歳試を受けた友人たちの書いた文章を、扶乩によって招かれた神に読んでもらった。李忋という人の文章は採点者が無能であるせいで、神が最初に言った通り四等に分類されたが、李忋は神の暗示を受けて文名が高い孫子未に自分の文章を読んでもらい、高い評価を得たため、翌年の試験で神が予言した通り優等を取ったという話である。文末に蒲松齡は、職務を疎かにし、女遊びにふける官僚が多いことを嘆いた感想文を残している。

幕中多此輩客、無怪京都醜婦巷中、至夕無閑床也。嗚呼。

幕中 此の輩の客多く、京都の醜婦の巷中、夕ゆふべに至らば閑床無きを怪しむ無かれ。嗚呼。

上のような窃盗、姦淫などの悪事を戒める話や官僚の腐敗、無能を揶揄する話は、内容によって「奇人異事」の要素が含まれる場合もあるが、「勸善懲惡・時弊を批判する」意図が強く窺えるため、一つの分類とすることができる。

以上の二種類以外にも、『聊齋志異』には人間のほかに、狐、魚や花など様々な生物が化けた女性が登場し、男性（苦境や危機に陥る場合が多い）と恋愛・結婚するという恋物語も少なくない。このような話に登場する女性のほとんどが楚々として愛くるしく、教養があり、家事も完璧にこ

なせ、そればかりでなく、特殊な能力を持っている者もいる。

上の表にある「巧娘」や「神女」はまさにそれである。「巧娘」を要約すると、傅廉という天闕（陰茎発育不全）を患有若者は、狐が化けた三娘の母からもらった薬によって疾患が治り、三娘と巧娘という鬼と相次いで夫婦の関係となる。二人の女性は睦まじく、ともに傅廉の両親を傅いた。巧娘が産んだ息子は聰明であり、十四歳の時に秀才となつたという話である。

三娘と巧娘の容貌について、「妖麗無比（人を惑わすほどあでやかで美しく、世に比べる人がいない）」「姿態艶艷（姿が目が覚めるほど美しい）」という描写が用いられている。また、物語の終わりに、傅廉の父が病気になり、傅家は医者に来てもらつたところ、巧娘が「魂が体から離れたため、治りようがない」と言い、棺を用意するよう言いつけたことから、人の魂を見ることによって、生死を予測する能力を持っていることが分かる。

「神女」は篇名が示す通り、神力を持つ女性に関する話である。男主人公の米生は、岳神の下で働く役人の娘と結婚し、さらに博士という妾を置いた。神女は「絶代佳人」でありながら、婦道を全うし、人の願いや命数を知ることができる能力を持っている。一方、博士は人間であるが、「貌亦清婉（容貌も清らかで艶やか）」であり、神女とも睦まじく、二人の息子を産んだ。

上の二篇に対して蒲松齡は感想文を残していないが、「小謝」という書生陶望三が道士の助けのもとに、鬼であった秋容、小謝の二人の美人を生き返らせ、良縁を結んだ話に対しては、次のような感想文を残している。

絶世佳人、求一而難之、何遽得兩哉。事千古而一見、惟不私奔女者能遘之也。道士其仙耶。何術之神也。苟有其術、醜鬼可交耳。

絶世の佳人、一つを求むるも難きに、何遠ぞ両つを得んや。事 千古にして一たび見、<sup>なん</sup>惟だ奔女を私せざる者のみ 能く之に<sup>あ</sup>遘ふなり。道士 其れ仙か。何ぞ術の之れ神なるや。<sup>いや</sup>苟しくも其の術有らば、醜鬼交ふべきのみ。

感想の内容から、陶望三の経験に対する蒲松齡の羨ましさが窺える。

「神女」の米生と「小謝」の陶望三は、はじめは貧しかったが、努力家で正直であるため、良縁に恵まれてもおかしくない。しかし、「巧娘」に登場する傅廉は、立派な性格の持ち主ではないにもかかわらず、陰部の疾患が治り家に帰った後、欲望が抑えきれないため婢女を姦淫し、白昼堂々としても回避しなかった。この行動には親に自分の疾患が治ったことを証明したい意図が潜んでいるが、上文に引いた「韋公子」と「小謝」に見られる「異史氏」の感想文に相反する行為である。傅廉のように、そこまで品行方正とは言えないものの、美女と一夜をともにしたり、夫婦の契りを交わしたりする男性はほかにも多数存在する。

このことについて、李志琴は「『聊齋志異』的叙事視角与男性意淫」で次のように述べている<sup>14)</sup>。

蒲松齡の小説世界に登場する女性の多くは美貌と優しさを兼ね備えている「女神」であり、教養があつて礼儀正しく、綺麗で情が深い。男主人公は一般的に落ちこぼれの書生か科挙を受ける途中に荒れ寺に宿る書生である。これは夢という精神世界の投影である。この世界にい

14) 『蒲松齡研究』2019年01期、蒲松齡紀念館。原文は次の通りである。蒲松齡小說世界的女性形象很多都是集美貌与溫柔於一身的女神、知書達理、美貌多情。男主人公一般都是落魄書生或者考挙途中夜宿荒寺的書生、這是虛幻的精神世界投影。在這個世界里女性形象是男性玩味的對象、花妖狐魅自薦枕席、与書生狎昵、慰藉書生的寂寥、而書生也在這種虛幻的愛情世界里找到了精神的依託。這与蒲松齡的客居生活是分不開的、是「久以梅鶴當妻子、且將家舍作郵亭」的蒲氏愛情烏托邦、是一個男性對女性的渴望的直觀表達…

る女性像は男性の玩味する対象である。花や狐などの妖怪は自ら書生を寝所に誘い、馴れ馴れしくし、彼らの寂しさを慰め、書生もこのような幻の愛情世界に精神を託す場所を見つめた。これは蒲松齋の客居生活と切り離せない関係がある。「久しく梅鶴を以て妻子に当たり、且つ家舎を将て郵亭となす」蒲氏にとって（『聊齋志異』に描かれるこれらの話は）理想の愛情世界であり、それはまた男性が女性を渴望する直観的な表れでもある…

李氏がまとめた通り、蒲松齋は長年外で塾師を務めていたため、家にいる時間が少なかった。そこで、彼は理想的な女性と触れ合う夢を作品に託したのである。「神女」や「小謝」のように、男たるもののは堂々と生き、努め励むべきであるという「勸善」や「奇人異事」の話として読み取れなくはないが、やはりある種の女性に対する妄想として捉えたほうが適切だろう。

このように、狐、鬼、人という登場人物の属性とは関係なく、『聊齋志異』の話は大まかに「奇人異事」、「勸善懲惡・時弊批判」、「美人賢妻」の三種類に分類することができる。当時『聊齋志異』に関する謎語を作った作者たちは勿論、蒲松齋と同様男性である。そこで、彼らは同書に描かれるある種の恋愛物語に興味を持っていることが謎語の引用から分かる。

### 三

『聊齋志異』には以上三種類の要素のうち二種類、もしくは三種類全てを有する話が多い。そこで、もし美人と情交を結ぶことや美人の妻、賢妻（もしくは妾）に関する描写が含まれる話を取り上げるならば、第一節に挙げた表に下線を引いている篇名八十八篇がこれに当たる。

これらの話には、「封三娘」や「葛巾」のように、美人の妻のほか、さらに他の美人と肉体関係を結ぶ話もあれば、美人の妻か賢妻が男性と一時的に同居した後、何らかの原因で離れた話もある。さらに、「天宮」や「真定女」のような美人と一時的に男女の関係を持つ内容が含まれる話や、狐が化けた少女を買い育てて妊娠させたという特殊な話もある。このような「美人賢妻」類の話は、上の表にある二百六十二篇のうち、約三分の一の量を占めていることが分かる。また、「美人賢妻」類の話でありながら上の表に挙げていない話を見ると、五十一篇がこれにあたる<sup>15)</sup>。

一見すると、「美人賢妻」類の話の数はほかの二種類より特に際立っているわけではないが、「美人賢妻」類の話をさらに細かく分類すると、当時よく受け入れられた話の類型が浮き彫りになってくる。

「美人賢妻」類の話は、まず美人類、賢妻類、美妻類に大別される。美人類の話に登場する女性は、男性と男女関係を持つ段階に留まり、婚姻には至っていない。上文の「双灯」や「緑衣女」がそれである。賢妻類の話に登場する妻は、苦労を厭わず婦道を貫く女性であるが、容姿に関する描写が欠けているか容姿に関する描写があったとしても、その容姿はいまひとつ美しさに欠けている。「喬女」「珊瑚」「土偶」などがこれである。美妻類とはつまり、美人の妻が登場する話のことである。これらの話はまた、一夫一妻と一夫多妻（妾を含めて全員美しい）、一夫多妻（妾を含めて容姿に関する描写がない人物がいる）の三つに分けることができ、さらに話の最後まで一緒に暮らしているか否かによって二つに分けることができる。なお、先行研究では、複数の美人が登場する話に対し、それぞれ「蓮香」と「香玉」に登場する二人の美女を言う時に使われる「双美」を用いて体

---

15) ここでは、四百三十二話を収録する青柯亭本『聊齋志異』（前掲注10書）を使用した。なお、四百九十八話（二篇の「又」を除き）を収録する『聊齋志異会校会注会評本』（前掲注10書）では、五十三話がそれにあたる。

系化されている<sup>16)</sup>。

このような「双美」の話、それも男女（生まれ変わりを含めて）が最後まで離れていないと判明できる話のほとんどが清代の謎語に取り込まれている。『聊齋志異』には、これに当たる話が「巧娘」「連城」「小謝」「蓮香」「神女」「青梅」「八大王」「江城」「寄生附」「邢子儀」「嫦娥」「陳雲棲」の十二篇ある。このうち、「江城」に登場する江城は、美貌を持っているものの、老僧の説法を聞くまで横暴な嫁であったが、結局心を入れ替えて優しく夫の家族に接し、うまく財務を管理することで生活を豊かにさせ、夫と惹かれ合う名妓を身請けした。話の最後に科挙を受けて家に帰った夫は二人の女性がともに碁を打っているのを見た、としか書かれていないが、流れから見ると一夫多妻となるため、計算に含めた。

「巧娘」を当てさせる謎語が『映雪山房謎語』に所収されてから、「陳雲棲」を除く以上十一篇の話が次々と謎語に取り込まれた<sup>17)</sup>。姚穎氏は「『双美共侍一夫』故事模式的背後—以『聊齋志異』和子弟書『志目』為例」で、『聊齋志異』から取材された清代の子弟書（語り物の一種）に考察を加えることによって、同書の女性を主な描写対象とする子弟書の多くは「双美」の話に基づいていることを解説している<sup>18)</sup>。このような傾向は、酒席の遊興に供される酒令からも窺える。『中国酒令大觀』には清代に作られた「『聊齋』酒令」と「『聊齋』酒令百注」が収録されており、それぞれの作品には百条の酒令がある<sup>19)</sup>。酒令ごとに『聊齋志異』にある話が引用されているため、両作品に取り込まれる話をまとめると、以下の

16) 例えば、吳瓊「『聊齋志異』同篇双女情節及其文化内涵」（『蒲松齡研究』2007年第3期、蒲松齡紀念館）や王銳「美与德的結合—『聊齋志異』『双美』婚姻模式再解讀」（『長春教育學院學報』第29卷第8期、『長春教育學院學報』編輯部、2013年）などがある。

17) 「嫦娥」は第一節の表に挙げられていないが、清末民初の徐兆瑋編纂の『灯虎匯編』に謎語の答えとして取り込まれている。

18) 『蒲松齡研究』2011年第4期、蒲松齡紀念館。なお、姚氏は物語の最後に男女が一緒にいるかどうかという選択基準を設けておらず、ただ二人の美人が登場する話を複数挙げて論述している。

19) 麻國鈞・麻淑雲『中国酒令大觀』（北京出版社、1993年）「籌子類」。

ようになる。

引用された回数	篇名
8	章阿端
7	狐夢、嬰寧
6	司文郎、西湖主、巧娘
5	連瑣、陸押官、鳳仙
4	粉蝶、王六郎、青梅、翩翩、蓮香
3	呂無病、恒娘、辛十四娘、邵女、蓮花公主、綠衣女、彭海秋、顏氏、鳳陽士人、胡四姐、狐譖
2	胭脂、鬼作筵、小二、申氏、黃英、放蝶、黃九郎、梅女、仙人島、甄后、小謝、于去惡、真生、成仙、阿英、瑞雲、俠女、嬌娜、畫痴、神女、勞山道士、青鳳、雲蘿公主
1	王桂庵、狂生、雨錢、寒月芙蕖、劉海石、雷曹、苗生、五通、牛痘、周三、長治女子、顛道人、齊天大聖、青蛙神、金陵女子、老饕、江城、封三娘、胡四娘、宦娘、阿繡、小翠、湘裙、三生、顧生、丐仙、細侯、湯公、白秋練、陳雲棲、晚霞、王成、狐嫁女、葛巾、邢子儀、林四娘、績女、陸判、荷花三娘子、香玉、阿纊、天宮、土偶、菱角、画壁、劉夫人

これら二百条の酒令には、『聊齋志異』の話が九十四篇ほど引用されている。「美人賢妻」類の要素が含まれる話は下線部が示すように六十四篇あり、ほかの二種類の話に比べ、かなり高い割合を占めていることが分かる。このうち、「双美」の話もやはり多く引用されている。上文に挙げた、男女が話の最後まで離れていないと判明できる十二篇の話のうち、「巧娘」

「青梅」「蓮香」「小謝」「神女」「江城」「陳雲棲」「邢子儀」の八篇が引用されている。これら八篇の中では、「巧娘」が六回と引用される回数で最も多く、「青梅」「蓮香」がそれぞれ四回と「巧娘」に次ぐ多さである。また、一回以上引用されている話が四十八篇あり、このうち「美人賢妻」類に当たる話は三十七篇ある。最も多く引用されている「章阿端」もまた妻のほかに、さらに一人の美人と一時的な男女関係を持つ話であり、それに次ぐ「狐夢」「嬰寧」は狐が化けた美人との艶話である。

謎語や酒令のほかに、戯曲においても「巧娘」「青梅」「蓮香」を含め、美女が登場する多くの話が、清末から民国初年にかけて改編されたことが確認できる<sup>20)</sup>。子弟書は主に北京を中心に流行した芸能であるのに対し、「巧娘」や「蓮香」は四川省一帯に伝わる川劇に改作がある。子弟書や戯曲を作るにはある程度の文学素養が要求されるが、それを享受する側にとってはそこまで教養がなくても理解できるため、これらの「美人賢妻」類の話は地域を問わず人気があることが窺えるほか、階級を越えて当時の人々、特に男性に愛させていたことは間違いないだろう。

## 四

第一節で触れたように、沈起鳳の『諧譯』と和邦額の『夜譚隨録』に所収の志怪小説も、『聊齋志異』ほど多く謎語に取り込まれていないが、それぞれ九条と三条ほど確認できる。

前者は「雉媒」「車前數典」「鄙夫訓世」「蘇三」「筆頭減寿」「頂上円光」「虫書」の七篇、後者は「人同」「紙錢」「鬼哭」の三篇が謎底として使われている<sup>21)</sup>。「雉媒」を当てさせる謎語が三条あるのに対し、それ以外の

---

20) 鄭秀琴「清代『聊齋志異』戯曲改編及其研究綜述」(注2論文)に詳しい。

21) なお、「人同」は「來存」という話に見られる内容の一部である。

篇名はそれぞれ一条だけ確認できた。これら十篇の話のうち、貴陽の某太守の母が亡くなる夜に婦人に見える鬼の泣き声を聞いたということを記録した「鬼哭」や、好奇心の強い二人の青年が蝶のように飛び舞う紙銭を追うことで、相次いで亡くなったという「紙銭」のように、単純に「奇人異事」を述べた話もあれば、「鄙夫訓世」のように私利私欲をむさぼる商人が悪鬼に連れ去られたことを書くことで「勸善懲惡・時弊批判」をする話もある。

これに対し、三回謎底にされた「雉媒」は、一夫四妻の話である。穆という翁は七十歳の独り身であるが、仲人に頼んで配偶者を求めようとした。しかし、返事が全く来ず、仲人を促す穆翁は逆に笑われた。憤りを感じた翁は飼っていた鳥をすべて放ち、旅に出た。そこで、ある日山にある大宅に入り、鳥が化けた四人の若い女性に出会った。桑という夫人の仲立ちによつて翁は先に鶯娘と結婚し、さらに桑夫人からもらった薬を飲んで十五、六歳の少年に若返りした。その後、穆翁はさらに鵲娘、翠娘、燕娘と縁を結び、五人は仲良く暮らしていた。話の最後は、五人が住む桑の樹が伐採されたため、穆翁は現世に戻り、四人の女性は鳥に変わり、空へ飛んで行ったのである。

『諧鐸』所収の話は同書の書名が示すように、面白い物語の中に作者である沈起鳳の社会に対する風刺や戒めが潜んでいる。沈氏は「雉媒」に残した感想で、穆翁は飼っていた鳥を放つことによって善行を積んだため、上のような出会いに恵まれたのだろう、と推測していることから、多少なりとも「勸善」の意図を示していることが窺える。しかし、「雉媒」だけが複数回謎語に引用されたのは「勸善」という要素のためではなく、穆翁が一時的にしか一夫多妻の生活を楽しめなかつたとはいえ、四妻に囲まれただけでなく、若さを取り戻したという話の内容から、やはり『聊齋志異』の「美人賢妻」類の話と同様、男性の好みに合わせて選ばれているか

らではないだろうか。

## おわりに

清代に作られた謎語における『聊齋志異』の引用を見ると、引用数の上位にある「果報」「陸判」「美人首」「織成」などはそれぞれ「奇人異事」類、「勸善懲惡・時弊批判」類、「美人賢妻」類に属しているため、どの種類にも人々によく知られ、好まれる話が少なからずあることが分かる。その中でも、『諧鐸』所収の「雉媒」を含め、「美人賢妻」類の話、特に「双美」のような一夫多妻の話は、謎語だけでなく、酒令や子弟書にも多く取り入れられたり、戯曲の改作も複数存在したりすることから、これらの話は様々な経路で、深く民間に浸透していたのだろう。蒲松齡は、鄉試に落第し続け、举人にもなれずに、晩年まで清貧な生活を送っていた。そのため、社会の暗黒面を暴き出す話を少なからず作ったが、韓春農の『三惜書屋謎稿』や葛甡の『余生虎口虎』に「美人賢妻」類の篇名が比較的多く収録されていることから<sup>22)</sup>、『聊齋志異』は当時の知識人たちに社会問題を考えさせる本でありながらも、くつろぎの場における男性の遊興に資する内容の多くは、理想的な美人が描かれる艶話から取っていることが窺える。

※ 本研究は JSPS 科研費 19K23042 の助成を受けたものである。

---

22) 『三惜書屋謎稿』（清末成立、前掲注 6 書『中華謎書集成』第一冊）に「封三娘」「鴿異」「小二」「神女」「織成」「美人首」と、「美人賢妻」類の篇名（下線部、下同じ）を当てさせる謎語が多数収録されているほか、「秋容」「孫子楚」という「小謝」「阿宝」に登場する人物をそれぞれ当てさせる謎語も収録されている。光緒六年（1880）成立の『余生虎口虎』（前掲注 6 書『中華謎書集成』第二冊）には「小官」「素秋」（謎面が違う謎語が二条）、「蓮花公主」「巧娘」「酒友」と収録されており、六条のうち、「美人賢妻」類の篇名を当てさせる謎語が四条ある。